

論文番号 45

担当

滋賀医科大学 福祉保健医学講座

題名 (原題/訳)

Smoking, Alcohol, Sleep and Risk of Idiopathic Sudden Deafness: A Case-Control Study Using Pooled Controls

喫煙、飲酒、睡眠と特発性突発性難聴の危険度との関係

執筆者

Meiko Nakamura, Nobuo Aoki, Tsutomu Nakashima, Tomoyuki Hoshino, et al.

掲載誌 (番号又は発行年月日)

Journal of Epidemiology, 2001; 11: 81-86

キーワード

突発性難聴、症例—対照研究、喫煙、飲酒、睡眠

要旨

突発性難聴の原因は、はっきりと特定可能な場合もあるが、多くの場合は原因不明であり、これらのものを特発性突発性難聴という。血管の損傷が特発性突発性難聴を引き起こしているとされている。しかし、喫煙やアルコール摂取といった循環器疾患危険因子と特発性突発性難聴との関係についてははっきりとはしていない。そこで、特発性突発性難聴と喫煙、飲酒、睡眠時間との関係を症例—対照研究で検討した。

症例としては日本の病院で1996年10月から1998年8月の間に特発性突発性難聴と診断が確定した患者を用いた。対照群としてはコントロールとして登録された人の蓄積されたデータベースから性、年齢、居住地域を一致させた人を選び出した。曝露因子については自記式の間診票により調査を行った。また、聴力検査の結果によって分けられた突発性難聴の種類とこれらの曝露因子との関係についても分析を行った。

データとしては症例群164例、対照群20,343例のデータが得られた。1日に2単位(1単位はエタノール27グラム)以上のアルコールを摂取している人では飲酒をしていない人に比べてオッズ比が1.90(95%信頼区間:1.12—3.21)であった。しかし2単位未満の飲酒をしている人では、オッズ比が1.40(95%信頼区間:0.89—2.20)で、統計学的には有意ではなかった。

また、一晩の睡眠時間が7時間未満の人の場合、オッズ比が1.61(95%信頼区間:1.09—2.37)であり、睡眠時間と特発性突発性難聴との間に有意な関係が認められた。

しかし、喫煙に関しては、タバコを一日に20本以上吸う人の場合オッズ比は1.38(95%信頼区間:0.85—2.24)で、突発性難聴との間に統計学的に有意な関係は認められなかった。

突発性難聴の種類と曝露因子との関係では2単位以上の飲酒とprofound typeの難聴との間に強い関係が認められた。(オッズ比5.55、95%信頼区間:0.99—31.23)

結論としては、喫煙と特発性突発性難聴の間には明らかな関係は認められなかったが、この研究においては、アルコール摂取と睡眠時間が短いことが特発性突発性難聴の危険因子である可能性が示された。